

ヒュームの「理性に関する懐疑論」について

渡辺 一弘

はじめに.

『人間本性論』第一巻第四部第一節「理性に関する懐疑論について」で提示される懐疑的議論は、ひじょうに評判が悪い。いわく「最悪(the worst)」(Stove, 1973, p. 132)、いわく「泥沼(morass)」(Fogelin, 1985, p. 16)と、大変ないわれようである。実際その議論はまずもって不明瞭であり、どこかがおかしいと感じさせるものの、どこがおかしいのか簡単にはつかませない厄介な代物である。近年、少なくない解釈者たちから様々な欠陥の指摘とそれに対する擁護が提出されているが、本体のテキストの曖昧さゆえに、まさに泥仕合の様相を呈している感がある⁽¹⁾。

本稿では、批判と擁護の応酬にいきなり首を突っ込むような真似はせず、「泥沼」それ自体のいわば実地探査をおこなう。すなわちこの懐疑的議論がどのような構造をもつのか、そこでは何が問題とされ、どんな前提がおかれ、その前提は何を意味し、どんな道具立てが用いられ、それらがどのようにこの議論を成り立たせ、どんな帰結がもたらされるのか。こうしたことを、周囲の地形や状況の調査も勘案して正確に割り出すことを目的とする。泥仕合に参戦するのはその後でも遅くないだろうし、うまくいけば、無駄な争いをしなくてよくなるかもしれない。

本稿は次のような順序で進行する。まず第1章ではヒュームのテキストに即して「理性に関する懐疑論」の論理を追い、第2章においてヒュームによるその提出の意図を確認する。つづく第3章では信念論、また第4章では知性論の結論に目を向けることで、「理性に関する懐疑論」の問題意識や、そこにおかれた前提の意味を含めて、その具体的内実を浮かび上がらせる。最後に、この懐疑的議論がヒュームの知性論においてもつ意義に触れることにする。

1. 「理性に関する懐疑論」の論理

1.1 ステップ1：すべての知識は蓋然性へと劣化する

「理性に関する懐疑論」は、主要なステップとして次の二つを含んでいる。すなわち、(1) いかなる論証的知識も蓋然性(probability/蓋然的信念)へと劣化し、(2) いかなる蓋然性も結局は無に帰す、というものである。それゆえまず、ヒュームによる知識と蓋然性の区分を簡単に確認しておこう。ヒュームにおいて知識(knowledge)とは、とくに観念の比

較のみに依存するアприオリな知識のことを指す。すなわち数学や形式論理学などの論証的知識である。また蓋然性とは、対象の観念だけからは見出せない、経験から知られる信念全般を指す([1.3.1], [1.3.2])。

このように、ヒュームは論証的知識と蓋然的信念を明確に区別しており、「理性に関する懐疑論」も「すべての論証的学問において、規則は確実で不可謬である」([1.4.1.1])という言葉とともに始まる。しかし、論証的知識としての規則がいかに確実であっても、私たち人間がそれらを扱う能力は不完全である。それゆえ、もし理性的に思考し推論しようとするなら（自分がたんに独断的でない根拠にしたがって推論や判断をしていると主張したいなら）、私たちは、あらゆる推論において、最初の信念や判断の正確さを確かめる判断をなさなければならない、とヒュームはいう。

この確かめとしての新しい判断は、何にもとづいてつくられるべきか。それはいわば一種の歴史にもとづいてである。すなわち、これまでの同じような推論において、結論が正しかった事例と、間違っていた事例とが、それぞれどれくらいあったかを反省して比べてみる必要があるのだ。ヒューム自身の言葉を引いてみよう。

…私たちは、すべての推論において、最初の判断または信念に対する抑制または制御として、新たな判断を形成しなければならず、視界を拡大して、知性の証言が正しく真であった事例と比較された、知性が私たちを欺いたすべての事例の、いわば歴史を、考察の範囲に収めなければならない。([1.4.1.1])

ここで「歴史」といわれるものが、これまでの経験を指していることは明らかである。すなわち、論証的知識にもとづいた判断も、その正確さについての自覚的な主張であるかぎり、経験的要素が混入せざるをえない。この意味でヒュームは、「すべての知識は蓋然性へと劣化する」([1.4.1.3])と主張するのである。

1.2 ステップ2：すべての蓋然性は無に帰す

さてここまでで、私たちが理性的に推論しようとするれば、いかなる論証的知識に対する信念も蓋然的であらざるをえないことがヒュームによって説明された。つづけてヒュームは、蓋然的信念もまた、その正確さについての新たな反省をまねがれることができないと主張する。どんなに博識で経験豊富な人でも過去に間違ったことはあり、未来における同様の誤りを危惧せざるをえないので、「〔蓋然的判断において〕私たちはつねに、対象の本性から生じる最初の判断を、知性の判断から生じる別の判断によって、修正しなければな

らない」([1.4.1.5]、括弧内引用者)のである。

私たちが自らの信念について、独断的な確信とは別のレベルで確からしさを主張しようとするならば、たしかに最初の判断の確からしさ自体を反省して吟味すべきであろう。その意味でヒュームの主張は穏当なものに思える。しかしその行き着くところは過激である。ヒュームは、判断の確からしさに関する自省的な吟味は連鎖的につづかざるをえず、かつ、それぞれの新しい吟味は元の蓋然性を減少させるので、最終的にはすべての蓋然的信念が無に帰さざるをえない、と結論するのである。ヒュームによる論証の核心部分を引用してみよう。

…すべての蓋然性において、主題に内在する元の不確実性のほかに、判断する能力の弱さから生じた新たな不確実性を見出し、これら二つの不確実性を調整したのちに、私たちは理性によって、自らの諸能力の真実性と正確さに対して行う評価における誤りの可能性から生じる新たな疑いを、つけ加えざるをえない。これは、直ちに生じる疑いであり、私たちが理性の歩み〔推論〕を忠実にたどるならば(if we wou'd closely pursue our reason)、決定を与えることを避けることができない疑いである。([1.4.1.6]、括弧内引用者)

まず「主題に内在する元の不確実性」がある。たとえばある日、空を見あげて、おそらく明日は雨だろうと判断する。雲の量など現在の空の状態を過去の経験に照らすことによって明日の天気を予測しようとするのは、帰納による経験的判断であり、絶対確実なことはいえない。もしかしたら晴れるかもしれない、という可能性を含んだうえでの判断である。これが主題に内在する不確実性である。次に「判断する能力の弱さから生じる不確実性」が見出される。私はさきの判断を、雲が空の半分以上を占めていたら明日の天気は7割の確率で雨、という経験則にもとづいて導きだしたつもりでいるとしよう。そして私がこの経験則を空の状態に正確に適用できていたかどうかが確実でない、というのが「判断する能力の弱さから生じる不確実性」である。雲の量を見誤っていたかもしれないし、目では雲の量が半分以下だと確認していたのに（明日はぜひ雨が降ってほしい！という願望に押されて）、なんとなく、よし雨だな、と思ってしまったのかもしれない（そしてその直後に経験則から推論したつもりになっていたのかもしれない）。これらの二つの不確実性を見出してしまった以上、私がもし理性的であろうとするならば、自分自身の「判断する能力」に対する評価を反省してみなければならないだろう。これまで何度も同じ経験則から次の日の天気を予測してきたが、よくよく考えたら、10回中3回くらいはボーっとしてい

て、この経験則を間違っ適用していたような気がしてきた。この疑惑が「自らの諸能力の真実性と正確さに対して行う評価における誤りの可能性から生じる新たな疑い」である。

このような理性的で慎重な態度はとても望ましく、物事の判断に確実さを与えてくれるように思える。しかしヒュームは、こうした私たち自身の判断能力にかんする自己吟味は皮肉な結果をもたらすという。以下は先の引用のつづきである。

…しかし、この決定は、それが先行する判断にどれほど有利なものであっても、ただ蓋然性にのみとづいているので、最初の明証性をさらに弱めるはずであり、それ自身も、第四の同種の疑いによって弱められるはずであり、同様のことが無限につづき、こうして、元の蓋然性をどれほど大きなものであったと仮定しようとも、また、新たな不確実性による減少をどれほど小さいと仮定しようとも、最後には、元の蓋然性がまったく残っていないという事態に、至るのである。([1.4.1.6])

「主題に内在する不確実性」が最初の、「判断する能力から生じる不確実性」が二番目の疑いの源泉である。そして「自らの諸能力の真実性と正確さに対して行う評価における誤りの可能性から生じる新たな疑い」が第三種の疑いであるが、これが 10 回中 3 回は間違っていたかもしれない、というほどつよい疑いではなく、10 回中 1 回は間違っていたかもしれない、という「先行する判断にどれほど有利なもの」であっても、それは蓋然性でしかないので、結局は元の判断の蓋然性を減らすのである。さらにヒュームがいうには、このような過程を繰り返していけば、元の信念が有していたはずの蓋然性が漸次的に限りなくゼロに近づいていってしまう。そしてヒュームは、この「理性に関する懷疑論」の帰結として、次のような破壊的主張を導き出す。

…さらに進んで、私が自らの諸能力について次々で行う評価のすべてに対して精密な吟味を行うとき、論理学の全規則は、信念と明証性の連続的な縮小を要求し、最後には、それらの完全な消滅を要求するのである。([1.4.1.6])

さて、このような破壊的な懷疑論を受け入れられるひとは稀であろう。こうした主張は私たちの感覚とまったく合致しない。というのも、この議論にしたがえば、私たちはなんらの信念をも持続的にもてず、判断を下せないはずだが、私たちは日々つねづね信念を抱き、実際に判断を下しているのだから。議論のどこがおかしいのかすぐにはわからないが、どこかがおかしいはずだ。ヒューム自身の答えは、私たちが推論や判断に際して理性の自

己吟味にどこまでもつき従わなければならないという、この議論の前提自体がおかしい、というものである。では、そうしたおかしな懐疑的議論を提出することで、ヒュームは何を言いたかったのか。次章では彼にこの点を尋ねてみよう。

2. このような懐疑的議論を提出したヒュームの意図

さて、前章でその論理を追ってみたことで、「理性に関する懐疑論」の基本的構造と、その帰結の破壊性は理解できた。では、この懐疑的議論をもってヒュームは何と言いたいのか。まずはっきりさせておかなければならないのは、この懐疑論が提出された直後にヒューム自身によって否定される、という事実である。

ここで、私が説き勧めようと大いに骨を折っているように見えるところのこの議論に、私がまじめに同意しているのか……と誰かが私に尋ねたならば、私は、この問いがまったく不必要な問いであり、私であれ、またほかの誰であれ、こうした意見を真面目にまたずっと変わらず抱いたことはかつて無かった、と答えるであろう。([1.4.1.7])

先の懐疑的議論に自身が同意しないばかりではない。ヒュームはさらに、実際においてこの懐疑的議論は全く無力であると主張する([1.4.1.7])。

それでは、なぜこのような架空の懐疑論が提出されたのだろうか。自らが同意しない懐疑論をわざわざ提出した意図はどこにあるのか。それは、次の二つの仮説の真理性を読者に気づかせるためであったのだ、とヒュームはいう。すなわち、

- (1)「原因と結果に関する私たちのすべての推論は、ほかならぬ習慣に由来している」
- (2)「信念は、より適切には、私たちの本性の思考的部分(cogitative part)の働きというよりも、感受的部分(sensitive part)の働きである」([1.4.1.8])

そして提示した懐疑論が現実といちじるしく乖離していることによってこれらの仮説の正しさが浮き彫りにされたと考え、ヒュームは次のようにつづける。

……彼は、自らの推論と信念がある感覚(sensation)であるということ、すなわち単なる観念や反省がそれを減ぼすことのできない、ある特殊な思念の仕方であるということ、を躊躇なく結論できるであろう。([1.4.1.8])

なるほど。かくも破壊的な懷疑論を提出したヒュームの意図は、その帰結がもつ非現実性を理由に、その議論の前提にある考え方、すなわち推論や信念の本性が思考的なものであるという考え方を覆すことにあったのだ。しかし、「思考的」という言葉でヒュームが何を意味しているのかについては、上記の説明をみても、それが「感受的」や「感覚」と対立的に使われているということ以外には、ほとんど不明である。しかしながら、この点が明らかにならなければ、「理性に関する懷疑論」の内実も理解できないし、ヒュームが具体的にどのような考え方を覆そうとしているのかもわからない。

しかし、先のようなヒュームの説明からすぐに気づくことが一つある。同じ内容の主張が、知性論第三部においてすでになされているのである。すなわち、現前する印象にもとづく信念が習慣から生じること^②、また蓋然的推論が一種の感覚であること^③は、第三部第八節「信念の諸原因について」で説明されていた。とすれば、ヒュームによる「理性に関する懷疑論」提出のモチーフも、第三部における信念論の問題意識を振り返ることにより明らかになるであろう。そしてそうすることによって、この「泥沼」的議論の内実も少なからず浮かび上がってくるはずである。それゆえ次章では、ヒュームの信念論に目を向けることにする。

3. 問題意識の源泉 ―信念論との関係―

信念とはなんであろうか。すなわち私たちが何かを信じたり、何かに同意したりするのは、いかなることなのであろうか。ヒュームによれば、信念とたんなる観念との相違は、「私たちがその観念を抱く仕方(manner)」([1.3.7.2])にのみ存する。また、知覚には印象と観念の二種類のみがあり、両者の違いは勢い(force)と生氣(vivacity)の度合いの相違にある。それゆえ、ヒューム哲学の体系内では、「観念を抱く仕方」の違いも勢いと生氣の相違に他ならない。こうしてヒュームは、意見すなわち信念を「現前する印象に関連する、すなわち連合している、生氣のある観念」([1.3.7.5])と定義するのである。

しかし、観念と信念の違いが勢いと生氣の相違にのみ存するというのは、明らかに問題を含んだ主張である。卓越した文学作品は虚構の登場人物の姿を読者にありありと思い抱かせるが、かといって読者はそうした人物が実在すると信じるわけではない。もちろんヒュームもそうした難点には気づいていた。附録(Appendix)として後に挿入された箇所において彼は、観念と信念との相違は、勢いと生氣の違いのみにとどまらない、各人がもつ感じ(feeling)の違いにあるのだと修正する^④。

ただ、より具合の悪いことに、ヒュームによれば信念の形成には想像力や情念といった要素も寄与してしまう^⑤。となると、私たちが対象について抱く信念が、その対象の

現実のありようを正確に反映しているとなぜいえるだろう。観念説を採るヒュームは上記のように信念を定義するほかないが、信念を、精神に内的なかたちで定義するかぎり、実在と虚構の区別の問題がつきまとうのである。

では、どうすべきか。実のところ、ヒュームは実在と虚構を区別するための次のような基準を提示している。

…記憶の印象ないし観念から、私たちは、内的知覚または感覚能力にかつて現前したことを記憶しているすべてのものを含む、一つの体系を形成する。そして私たちは、この体系に属するどの個体をも、現在の諸印象とともに、一つの「実在(reality)」と呼んではばからないのである。

…精神は、この知覚の体系に、もう一つ別の知覚の体系が、習慣によって、すなわちもしそういうことを望むなら、原因または結果の関係によって結びついていることを知って、…これらの観念を一つの新しい体系に形成して、この体系の諸観念に、最初の場合と同様、「実在」という称号を与えるのである。これらの体系の最初のものが、記憶と感覚の対象であり、第二のものが、判断力の対象である。([1.3.9.3])

この基準にしたがえば、私たちが「実在」と呼ぶことができるのは、感覚ないし記憶の印象や観念、そしてそれらと因果関係によって結びついている諸観念となる。ならば、感覚ないし記憶の印象から始めて、そこから生じた信念が、因果関係にもとづいているかをきちんと判定してやればよい。判定の作業からは想像力や情念の働きを極力排除しなければならないが、経験的判断に関わることをアプリアリな基準によって判定することはできない。そこで次善の策として用いるのが、これまでの経験と習慣から確立された「一般規則」である。

私たちはのちに、詩的熱狂と真剣な確信との類似点と相違点を述べる機会があるであろう。しかしさしあたって私は、両者の感じにおける大きな相違がある程度反省と一般規則から生じるということを、述べずにはいられない。([1.3.10.11]、傍点引用者)

ただし一般規則には、「より気まぐれで不確かなものとして想像力に帰される」ものと、「私たちの知性の本性と、対象に関して形成した判断における知性の働きについての経験にもとづいて形成され」「判断力に帰される」([1.3.13.11])ものの二種類があり、判定作業に役立つとすればそのうちの後者である。ヒュームによれば、この知性的一般規則こそが、「私た

ちがそれによって原因と結果に関する判断を規制すべきもの」なのである([1.3.13.11])。

知性的に形成された規則と反省にもとづく、信念の信憑性の吟味。ここまでいわれれば、これが「理性に関する懐疑論」導出のモチーフになっていることは誰の目にも明らかであろう。つまり「理性に関する懐疑論」で試されているのは、「真剣な確信」と「たんなる虚構」を区別するために、これまでの経験から確立された知性的規則にもとづき、反省することによって、信念の信憑性を吟味してみたらどうなるか、ということなのである。

4. 「理性による自己吟味」の内実 ―知性論結論との関係―

本稿第1章でみたように、「理性に関する懐疑論」は、先行する判断を別の知性的判断によって修正するという、理性による自己吟味の連鎖として構成されていた。さらに、そうした理性による自己吟味とは、具体的に言って、「判断の信憑性をこれまでの経験から確立された知性的規則にもとづいて反省する」ということである点が前章で明らかになった。しかし、これではまだ不十分である。だいいち、理性による自己吟味というときの「理性」の内容が審らかではない。こうした点を明らかにするには、知性論の結論（第一巻第四部第七節）に注目する必要がある。

まず下の引用によって確認しておきたいのは、「理性に関する懐疑論」における判断の吟味が、知性すなわち理性のみによって行なわれていることである。

すでに明示したように⁽⁶⁾、知性は、単独で(understanding, when it acts alone)その最も一般的な原理にしたがって働くときには自らを完全に覆し、哲学におけるものであれ日常生活におけるものであれ、いかなる命題においても最低限の明証性さえ残さない。
([1.4.7.7]、傍点引用者)

つまり、「理性に関する懐疑論」は、判断の吟味が「理性単独で」行なわれるという、かなり限定的な状況において成り立つ懐疑的議論である。では次に、この前提の具体的内容を明らかにしよう。つまり、理性単独という条件は、何を許容し、何を排除するのだろうか。まず明らかなのは、想像力のとりとめのない機能は排除されなければならないということである。なぜなら、精神はその信念形成において現実と虚構の区別をつけることができるのか、という問題が第三部から持ち越されたモチーフであったからである。さらにより強力な根拠として挙げられるのは、いま知性論の結論から引用した箇所の直前で、ヒュームは、理性に想像力を対置させ、そこからあるディレンマを導き出しているという事実である。

想像力の飛躍ほど、理性にとって危険なものではなく、哲学者たちの間でこれより多くの誤りの原因となったものはない。

…しかし、他方で、…私たちが想像力の些細な示唆をすべて拒絶することを決心し、知性に、すなわち想像力の一般的でより確立された性質につき従うことを決心するならば、こうした決心でさえ、もし一貫して実行されるならば、危険であり、もっとも致命的な結果を伴うのである。([1.4.7.6~7])

ここで、「一貫して知性に付き従うことによって到達する致命的な結果」が「理性に関する懷疑論」の帰結を意味していることは、この引用の直後に続く先の引用箇所によって明らかとなる。想像力にのみ従えば、間違いなく虚妄と誤謬に陥る。かといって知性にのみ従っても、信念の消滅という致命的な結果が待ち受けている。ヒュームはこれを「きわめて危険なディレンマ」とよぶ([1.4.1.6])。つまり、「理性単独で」という条件が想像力のとりとめのない機能を排除すると考えなければ、ここでのディレンマは成り立たなくなってしまふのである。

それゆえ、「理性単独で」行われるという判断の吟味は、想像力の働きを排除したかたちでなされなければならない。しかしここで、次のような疑問が生じるであろう。「理性に関する懷疑論」でなされていた判断の修正は、過去における判断の誤りにもとづいてなされていた。つまりそれは、帰納的な推論にほかならない。しかし帰納的推論、すなわち因果関係にもとづく蓋然的推論は、習慣と想像力によって生み出されると、ヒュームは再三にわたり強調してきたのではなかっただろうか。「理性単独で」なされるという判断の吟味が、もとをたどれば想像力の産物にすぎない蓋然的推論によってなされるなら、理性と想像のディレンマなど成り立たないではないか。このことは、経験と習慣から生じたものである以上、知性的一般規則についても同様にいえることである。しかしヒュームは、後に附録として付け足された箇所ではあるが、想像力という言葉を決定的に使い分けるとはつきり述べている。すなわち、想像力という語はふつう二つの異なる意味で使われるとし、自分は両者を次のように使い分けるといっているのである。

私が想像力を記憶に対立させるとき、私が意味するのは、私たちがより生気の無い観念を抱く能力である。私が想像力を理性に対立させて用いるとき、私が意味するのは、同じ能力から、ただ論証的および蓋然的推論を除いたものである。([1.3.9.note22])

想像力という語の意味に関する、ヒューム自身のこうした規定にしたがえば、先の疑問も解消し、「理性に関する懷疑論」で排除されるべき想像力の内容も、具体的に明らかとなる。すなわち、いま考察している状況では、想像力は理性に対立させられているのであった。それゆえ、「理性単独で」という前提条件によって許容される理性の機能とは、論証的・蓋然的推論である。また排除される想像力の機能とは、そうした推論能力以外の、記憶に比べて生気のない観念を抱く能力全般である。

先の引用においてヒュームは、知性を、「想像力の一般的でより確立された性質」と言いかえている。帰納推論は、もとをただせば想像力の産物にすぎないけれども、それはこれまでの経験によって「より確立され」ており、この意味においてたんなる想像力の無秩序な働きとは区別される。それではこの、より確立された想像力の性質を「理性」として認めよう。こうした意味での理性の働きのみを用いて、判断の吟味を続けていったらどうなるか。これが「理性単独で」という前提条件をおくときに、ヒュームが意図していることなのである。

それゆえ、以上のような意味で許された「理性」以外に、想像力の働きは一切排除されなければならない。そしてヒュームの信念論にしたがえば、このことが意味するのは、あらたな経験が禁じられているということである。次にこの点を明確にしよう。そのようにいえるのは、経験すること、いいかえれば、新たになんらかの対象を知覚して現在印象を心に流入させることは、不可抗力的に、情念と想像力を掻き立ててしまうからである。

感情に影響を与えるある対象が提示されると、その対象は警告を与え、直ちにしかるべき情念をある程度引き起こす。…この情動は、容易な移行によって想像力に移り、影響している対象についての私たちの観念の上に拮がり、私たちにその観念をより大きな勢いと生気をもって抱かせ、…私たちにそれに同意させるのである。([1.3.10.4])

あらたな経験、すなわちあらためて対象を知覚しなおせば、現在印象が流入し、情念が掻き立てられる。その影響は直ちに想像力に波及し、知性的判断を乱してしまう。それゆえあらたな経験は、「理性単独で」という前提条件に反するのである。そもそも、現在印象による情念や想像力の活性化をこの前提が禁じていることは、ヒュームが何のために「理性に関する懷疑論」を提出したのかを思い起こせば自明とすらいえる。ヒュームはこの懷疑論が背理に陥ると示すことによって、推論や信念が私たちの本性の「感受的部分(sensitive part)」にあることを証明しようとしたのだ。感受的部分への作用がシャットアウトされていると考えなければ、ここでいったいヒュームが何をしようとしているのか、まったくも

って意味不明になってしまうだろう。

以上をまとめると、「理性に関する懐疑論」でなされている「理性による自己吟味」とは、具体的に言って次のようなものとなる。すなわち、「自らが下した判断に関して、あらたな経験にうったえることが禁じられた状態で、これまでの経験から確立された知性的規則にのみもとづいて、内省し、その信憑性についての判断を下そうとする」こと、これである。

第1章での例を用いてひらたく言いなおせば、この懐疑論は次のような仮設的シチュエーションを想定していることになる。すなわち、私は空を見上げて、その空模様から、「明日は雨が降るであろう」との蓋然的判断を下す。しかしこの判断が正しいかどうか、吟味してみなければならない。私は一般規則に従い、先の判断の信憑性についてのあらたな帰納的信念を形成する。これらは許される。なぜなら一般規則と因果推論は、それが適切に行なわれるならば、確立された精神の働きとして知性的なものとみなすことができるからである。しかし、ここでもう一度空を見上げて、先の判断の証拠とした空模様が、証拠として正確であったかを確かめ直すことは許されない。なぜなら、新たな現在印象の流入は、想像力の働きを喚起し、「理性単独で」という前提条件が崩れてしまうからである。内省は許されるが、あらたな経験は許されない。対象について形成した信念が現実的なものか虚構に過ぎないか、もし頭の中だけで決着させようとしたらどうなるか、これが「理性に関する懐疑論」において想定されている仮設的状況なのである。ヒュームが転覆させようしたのは、そのような理性的原理主義の想定にほかならない。

おわりに。

「理性に関する懐疑論」の内実が、かくのごときものであるとすると、私たちはヒュームの知性論についてあたらしく何を知ることができるだろうか。この懐疑論の背理的性格から明らかになったのは、対象についての信念の真偽は、過去の証拠と、過去の経験から確立された規則だけからは決定できない、ということである。そしてこのことは、とりもなおさず、ヒュームが人間本性の学の基礎に据える「実験的推理法(experimental method of reasoning)」の擁護になっているのだ。これこそ本稿を通して浮かび上がった、「理性に関する懐疑論」の知性論における意義である。また、「自然本性に身を任せる」というヒューム知性論の最終的結論も、ヒュームの文学的な叙述に惑わされて、何か神秘的なもの、あるいはたんに人生論のようなものと捉えてはならない。本稿でみてきたことを踏まえれば、「自然本性に身を任せる」という表現でヒュームがいったかったことは、たとえば次のような、ごくシンプルなものであろうはずなのだ。

——さっきの判断に自信がもてなくなったって？それならもう一度、よく空を見てみなよ。

頭の中だけで考えてたって、答えなんか出やしないんだからさ。

註

- (1) 直接内容に言及することはしないが、本稿を書くうえでふまえた近年の解釈のうち主なものは、Dauer(1996), Dewitt(1985), Fogelin(1985, 1993), Imary(1995), Lynch(1996), Morris(1989)である。これらの諸解釈では、ヒュームの意図よりも、懐疑的議論それ自体が論理的に妥当なものかどうかの主な焦点となっている。とくに Dauer(1996)は、それ以前の解釈で提出された論点を総括的に整理したうえで、「理性に関する懐疑論」を論理的に妥当なものとしてみなす解釈を提示している。
- (2) 「…私たちは、…現前する印象にもとづいて生じるすべての信念はただこの起源〔習慣〕からのみ生じるということを、確実な真理として確立することができる」([1.3.8.10])。
- (3) 「…すべての蓋然的推論は、一種の感覚(sensation)にほかならない」([1.3.8.12])。
- (4) そうした感じの相違をヒュームは、「勢い(force)」「生氣(vivacity)」「堅固さ(solidity)」「確固たること(firmness)」「安定性(steadiness)」と呼ぶ([1.3.7.7])。
- (5) 「判断力と情念の間ばかりでなく、判断力と想像力の間においても、助力が相互的でありうる」([1.3.10.8])。
- (6) ここに「第 1 節」(＝1.4.1「理性に関する懐疑論について」)と原注が入る。なお、ヒューム自身がこのように指示していることから、すくなくともこの文脈では「理性」と「知性」が互換可能な語として使われていることがわかる。

文献

Hume のテキストはすべて

Hume, David (2000). *A Treatise of Human Nature*, eds. D.F. Norton and M.J. Norton, Oxford University Press, (first published 1739-40)

から。引用に際しては[巻・部・節・段落番号]のように表記した。

訳文については

木曾好能 訳 (1995). 『人間本性論 第一巻 知性について』, 法政大学出版局。

を参考にしたが、議論の都合上訳語・訳出に変更を加えた箇所がある。

伊藤邦武 (2002). 『偶然の宇宙』, 岩波書店。

—— (2003). 「懐疑論の効用——ヒュームの場合」, 『人間存在論』, 9号, 197-206。

Dauer, F. (1996). “Hume’s Scepticism with Regard to Reason: A Reconsideration” *Hume Studies*, Vol.22, Number 2: 211-229

Dewitt, R. (1985). “Hume’s Probability Argument of I, iv, 1” *Hume Studies*, Vol.11, Number 2: 125-140

Fogelin, R. J. (1985). *Hume’s Skepticism in the Treatise of Human Nature*, Routledge & Kegan Paul

—— (1993). “Hume’s scepticism”, in David Fate Norton (ed.), *The Cambridge companion to Hume*, Cambridge University Press, 90-116

—— (1992). *Philosophical Interpretations*, Oxford University Press

林誓雄 (2006). 「ヒューム道徳哲学における認識論的基礎」, 『実践哲学研究』, 京都大学文学部倫理学研究室実践哲学研究会。

Imlay, R.A. (1995). “Hume’s Of Scepticism with Regard to Reason: A Study in Contrasting Themes” in *David Hume Critical Assessments*, Vol.1, ed. Stanley Tweyman, Routledge, 278-288

Lynch, M. P. (1996). “Hume and the Limits of Reason” *Hume Studies*, Vol.22, Number 1: 89-104

久米暁 (2005). 『ヒュームの懐疑論』, 岩波書店。

—— (2006). 「内的懐疑論の懐疑的解決—渡邊氏の書評に答えながら—」, 『哲学論叢』, 京都大学哲学論叢刊行会。

Morris, W (1989). “Hume’s scepticism about reason” *Hume Studies*, Vol.15, Number 1: 39-60

Stove, D.C. (1973). *Probability and Hume’s Inductive Scepticism*, Oxford University Press

[京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員]